

全国から川内原発再稼働反対の声を現地へ！

「総合的な力」と「現地の闘い」がカギ
「あと2歩」推進側を追込み、全国で決起しよう！

柳田 真(共同代表)

■九州電力川内原発の再稼働か否かの闘いは、今、重大局面にかかっています。原発推進側は巨大にみえますが、内実はあちらこちらにひびが入り、穴があいている状況です。原発反対、再稼働反対の声（世論）は60%を超え（実態はもっと大きく70%台と思う）、もうひと回り、ふた回りの努力と勢いで迫れば川内原発再稼働阻止の展望が開けます。全国各地の闘い＝北海道から九州までの闘いと総合力が推進側を包囲します。その勢いで、九州7県で九州電力を包囲し、地元鹿児島県と薩摩川内市でのそれらを代表した闘い・行動力が再稼働断念を迫ります。全国で、各地で、全力で決起しよう。

■全国統一行動の第一波は、全国に広がっている

9月27日薩摩川内市で開かれた再稼働阻止全国ネットの相談会「川内原発をどう止めるか」は、全国から集まった110名の知恵と意見で、10月26日を軸とする1週間（10月23日～30日）を川内原発再稼働阻止全国統一行動日と決めました。

この闘いは、10月・11月・12月・1月の4か月決戦の最初の第一波であります。かつて原子力規制委員会・規制庁抗議行動を全国16の全原発立地で成功させた私たちは、その経験を活かして、10・26全国統一行動に取り組みます。

九州各地でも闘いが進んでいます（福岡、北九州、鹿児島、薩摩川内他）。東京でも3つの行動（10.15規制委員会前抗議行動と討論集会、10.26九州電力東京支社まえ抗議行動）がきまり、毎週金曜定例の官邸前行動で2000枚ほどのピラが配られ、闘いへの決起をよびかけています。広島でも伊方でもハガキ行動などの取り組みが始まりました。

10月26日（日）は、日本の原子力が始まった日でもあり、長く全国各地で「反原子力の日」としていくつかの行動が取り組まれてきた日でもあ

ります。川内原発の再稼働を阻止し、日本を再び「原発の国」としないための全国行動の日としてふさわしい日です。

秘密保護法反対、集団的自衛権反対、沖縄（辺野古基地建設反対）の闘いの人々も、ぜひ「川内原発を止める」闘いに共に立ってほしい。安倍政権の弱い環としての原発推進（日本核武装推進）を共同の大衆行動で打ち破り、安倍内閣への痛打としよう。

原発がなければ核兵器はつくれません。歴代の自民党政権の野望：日本核武装は、原発があつてこそそのものです。原発反対＝原発ゼロの闘いは、核兵器を保有したい支配層に大きな打撃を与えます。これまでも共に闘われた皆さんが更に、10月からの4カ月間をいっそうの力で、大衆的で迫力ある共同行動で闘おう。（次頁へつづく）

【7号 もくじ】

- §1.川内原発再稼働 どうすれば阻止できるのか◇広瀬隆
- §2.原発再稼働を狙う安倍政権を放逐しよう！ ◇鎌田慧
- §3.かごしまの地からー最終局面を迎える攻防に向け
◇岩井哲（かごしま反原発連合有志）
- §4.「住民説明会」はパフォーマンスに過ぎない！ ◇鳥原良子（川内原発建設反対連絡会、川内つゆくさ会）
- §5.「川内の家」活動レポート ◇岩下雅裕（「川内の家」）
- §6.「川内原発再稼働阻止全国リレーアクション」を終えて
◇藤岡彰弘（反原発市民の会・富山）
- §7.福島の人たちと現地の協力で「フクシマ」を伝える辻説法 ◇青山晴江（再稼働阻止全国ネット事務局）
- §8.「若狭の家」の設立と、その目指すところ
◇木原壯林（若狭の家 共同代表）
- §9.川内原発再稼働阻止テント群へ！
◇淵上太郎（経産省前テントひろば）
- §10.川内ー伊方原発再稼働に反対する南予住民の運動
◇八木健彦（「伊方の家」）
- ★全国自治体議員連名で初の陳情
◇反原発自治体議員・市民連盟 けしば誠一
- ★本の紹介 『浜岡・反原発の民衆史』 ◇北村小夜

■薩摩川内市や30キロ圏自治体のめざましい活動
官制の住民説明会に対し、薩摩川内市や30キロ圏内の各自治体の市民の活動はすばらしいものです（もちろん、私たちは30キロ圏に限定する相手のやり方に反対であり、もっと多くの自治体が発言権をもつべきと考えます）。

いま焦点となっている薩摩川内市内では、52円の住民アンケートハガキがたくさん配られ、記入された市民の声ハガキが議員の自宅へどンドン届き、議員と自治体の良心に鋭く訴え続けています。住民の盛り上がり、電力会社の影響下の議員や自治体首長（市長）に万力のごとく迫っています。私たちも全力で応援中です。

■規制委の9.10審査書決定は無効だ——石橋克彦氏の警句をきけ

日本の地震学の権威でもあり、自民党政府の地震委員でもあった石橋克彦氏が、科学誌で、週刊朝日で、東京新聞で、続けて、規制委員会の9月10日の川内原発審査書決定（合格）は、法律違反であり無効である、と厳しく勇敢に訴えています。規制委が定めた3種類の地震の検査を1種しかせ

ず、残り2種はなし、で合格させるのは違法で無効だという要旨です。100%納得いく文です。御嶽山の噴火…死者多数をみてもわかる通り、火山予知は至難。九電の「火山予知はできる」を認めた規制委はインチキの委員会です。再稼働ありきの委員会です。

■12月13（土）14（日）鹿児島へ集まろう

現地鹿児島県の3.11実行委は、12月14日（日）鹿児島県議会が焦点になる時期に再び大集会とデモを予定しています。

私たちも10月、11月、12月前半を全力で闘って、その上で12月13（土）、14（日）には再び全国から鹿児島へ結集したい。13（土）は川内原発再稼働を止めるための全国相談会、14（日）は大集会とデモ、両日の間に川内原発ゲート前抗議闘争と川内現地のテント激励を含む。

全国の皆さん、12月13（土）、14（日）鹿児島に集まろう！（10.15記）

★現地の情勢が早まる可能性が高まったので、行動日程も前倒しになる可能性があります。（10.18記）

【全国での取組み紹介】（10月17日現在）

- 10/19 第28回伊方集会 とめる伊方原発再稼働 とめる川内原発再稼働（原発さよなら四国ネットワーク）
- <<10/20 薩摩川内市議会（原発対策特別委） 再稼働同意決議か？>>
- 10/24 反原子カデー 関西電力へ申し入れ行動（若狭連帯行動ネットワーク）
- 10/24 【政府交渉】川内原発・避難計画／火山・地震審査 県民無視の再稼働手続きに待った！
- 10/24 中国電力島根支社抗議行動（さよなら島根原発ネットワーク）
- 10/26 久見崎海岸（川内原発近く）集会とデモ、ゲート前行動（薩摩川内市の地元団体）
- 10/26 第3回風船とぼそうプロジェクト（久見崎海岸周辺から）（九州川内原発訴訟風船プロジェクト）
- 10/26 川内原発を止めよう！ いま、ここから集会 in 八幡浜（伊方原発50km圏内住民有志の会）
- 10/26 STOP！川内原発の再稼働 広島集会（さよなら原発ヒロシマの会 他）
- 10/26 いらんわ！高浜再稼働 関西集会（脱原発政策実現全国ネットワーク関西）
- 10/26 反原子力の日 東京集会 とめよう！再稼働（原発とめよう！東京ネットワーク）
- 10/26 九州電力東京支店まえ抗議（東京・有楽町）（再稼働阻止全国ネットワーク）
- 10/26 脱原発高槻アクション（原発事故を考える高槻市民の会）
- 10/28 原発ゼロ上牧行動（原発ゼロ上牧行動）
- <<10/28 薩摩川内市 臨時議会に対し 再稼働同意への抗議（予定）>>
- ～ 12/13・12/14 ふたたび鹿児島へ！ ～（情勢により日程は大きく変更される場合があります）

■ どうすれば川内原発の再稼働を阻止できるのか？ と尋ねられて、すべてをここに書いてしまうと、相手にわれわれの手口を読まれるので、全部は書かない。まずこの問題は、二つに分けて考える必要がある。第一は、鹿児島県および薩摩川内市&30キロ圏内自治体という現地における反対・阻止運動である。第二は、日本の国政レベルでの反対・阻止運動である。

■ 具体的に川内原発の再稼働を阻止するために、何とんでも重要なのは、鹿児島県内における運動である。先日の9月28日の川内原発ゲート前の激しい抗議行動と、鹿児島市の天文館公園で開催された巨大なデモに「全国の人たち」が結集し、その成果が見られた通りだが、驚くべきことは、経産省前テント広場の人たちが、川内原発の目の前の海岸に抗議のテントを張ったことだ。偉い！

さらに福島県の放射能被害者の方たちが、鹿児島県内での辻説法や、商店街訪問などを展開してくださっている。また、反原発自治体議員・市民連盟と原発立地自治体住民連合とが手を結んで、全国の議員さんが鹿児島県議会と薩摩川内市議会に意見書を提出するという行動に立ち上がった。このような具体的な行動が、さまざまな発案によって出始めたので、このレジスタンスは今後の地元の動きをどんどん追い詰め、変えてゆく。↑



photoキャプション：

福島第一原発から北西14kmの浪江町で吉沢正巳さんが飼い続ける牛には、不気味な白い斑点が大量に出ている。長谷川健郎撮影。「生活と自治」2014年8月号

■ しかし私は今こそ、福島原発事故の被害者の人たちの力を借りたい。鹿児島県内でまだ思考停止中の県民は二割ぐらいだろうが、その人たちの意識をガラリと変えるために、この福島県の牛の写真を県内でどんどん活用してほしいと思っている。牛の体に異常が起こっているなら、誰でも、川内原発再稼働の危険性には気づくはずだ。

もう一つは、経済産業大臣の小渕優子が、鹿児島県民に向けて、「川内原発で大事故があった場合には、国が全面的に救済する」かのような発言をしていることを、福島原発事故の被害者の人たちが、もっともっと強く批判してほしい。「国は、福島県民の救済に何もしていない。私たちの現実を見てください。政治家の大嘘にだまされるな！」と、鹿児島県民に大声で伝えてほしい。

■ 第二の国政レベルでの反対・阻止運動は、9月23日の東京・亀戸中央公園の大集会に、やはり「全国の人たち」が結集した通りだが、電力会社の経営が断崖絶壁に追い詰められていることに、国民はもっと自信を持つ必要がある。

つまり電力会社離れが、全電力会社で起こって、原発再稼働にのめり込む彼らがにっちもさっちもゆかなくなっているのだ。再稼働をめざせばめざすほど、電力会社のコスト負担が重くなり、電気料金値上げに踏み込まざるを得ないところにきている。ところが値上げすれば、電力の大消費者である企業は馬鹿ではないので、ますます電力会社離れが加速して、電気料金の収入が減る。

そして、原発再稼働を何の道理もなく進めてきた安倍晋三政権は、日本経済の崩壊と共に、国民の信任を完全に喪失しているのだ。この事実を、われわれが自信を持って、もっともっと大声で叫ぶ必要がある。“クズ”のような人間を集める人事だけで国政を牛耳ってきたあの男も、内心で自信を喪失しているのだ。その敗北感が火を噴くのは、11月16日の沖縄県知事選だ。頭の中で、その日を射程に入れて行動してほしい。

■再稼働を進める安倍政権とはなにか。

安倍政権とは、もはや日本での原発の新増設が困難となった時代に、なおかつ原発を生産しつづけ、海外展開で利益を確保しようとする経団連傘下の原発メーカー（三菱重工、三菱電機、東芝、日立、IHI、日本製鋼などの兵器メーカー）の番頭政権である。あのグズグズ野田政権でさえ、原発反対の世論を無視しきれず、「2030年原発ゼロ」を言いだして、政権から転落した。人間的な感性があるならば「原発はやめよう」とするのが、当然の決断である。ところが、前世紀の遺物とも言うべき、時代錯誤の安倍政権は、これから原発輸出と武器輸出を推進するといつて、経団連からの献金を引き出すことに成功した。

■経団連幹部は、利益追求のためなら人が死んでも儲かればよいという「戦争資本主義」の信奉者であり、安倍政権はその実行部隊である。さらに言えば、戦争で人間を殺しても儲かればよい経済界の非情主義を、政策として実行する政権である。

戦争を禁止する憲法の裏口にまわって、法的手続きもせず、自分が任命した大臣たちに憲法違反を実行させたのが、安倍内閣の「閣議決定」だった。憲法に違反する「閣議決定」は、歴史を裏切り行為である。しかし、権力に対峙するはずの肝心のジャーナリズムは、大新聞、テレビともに、大衆追随、売れば良い欲望に捉われている。

朝日、毎日、東京、それと大方の地方紙は、まだそれなりに抵抗している。が、読売、産経などは、安倍内閣が企てる憲法改悪の追従者で、いわば経団連の「戦争資本主義」の宣伝機関と化し、安倍政権とおなじ戦前への回帰にむかっている。

その中での原発反対運動である。原発反対はあらたな価値観による、新しい社会を目指す、21世紀的な運動である。富国強兵、強権国家、中央支配、巨大技術、秘密主義、自然破壊、弱者犠牲、人権無視、もっとも非人間的なものの集約が、原発促進政策である。

■日常の労働がすでに被曝労働である。それが原発の非人間的の存在を表している。人間に対立する産業は、無意味である。産業は人間のためのものだからだ。福島事故は負の存在としての原発のすべての姿をあきらかにした。

原発は自然の敵であり、すべての生物のいのちの敵であり、つまりは、人間の敵である。

それを強行する政権は、速やかに政治の世界から放逐しなければならない。脱原発運動は、好むと好まざるとに関わらず、いまや政治的な運動となった。そうさせたのは安倍政権である。

脱原発運動は、政治のための運動ではない。しかし、政治から逃げて運動は成就しない。いま、日本の原発政策は自公政権の手に握られているからだ。



§ 3. かがしまの地から一最終局面を迎える攻防に向け

◇岩井哲（かがしま反原発連合有志）

1. 「住民説明会」2カ所を経て、あと3カ所

10月9日（木）薩摩川内市、10日（金）日置市の2カ所において「住民説明会」が開かれました。9日の説明会では、原子力規制庁の市村管理官らが、集まった約1000人の参加者を前にして火山や地震に関する従来の主張をスクリーンを用いて「新規制基準に適合すると判断した」と説明。参加者からの質問者10人中9人までは再稼働に反対意見だったが、これも織り込み済みで、最後の一人が明らかに「推進派」を代表して、「今日の説明で納得した。安全が担保されたと思う」と締めくくった。途中、これといった「波乱」も起きず、当局の思惑通りの「シャンシャン説明会」に封じ込められたというのが、残念ながら実態であった。

これに対し10日の日置市では、「地元同意」の「範囲拡大」の要望が出るなど前日とはだいぶ様相を異にし、進行中、ヤジと怒号が飛び交う展開になり、前夜のような押さえ込まれた雰囲気ではなく、「説明会」終了後も、規制庁や県の職員に喰ってかかる地元民もいるなど、国や県・市に対する憤懣が色濃く残された終わり際となった。

13日（月祝）予定のいちき串木野市での開催は、台風19号のため20日（月）に延期となったが、14日（火）阿久根市、15日（水）さつま町・始良市の3カ所での開催が残されており、そこでの闘い方も課題になっている。

2. 市議会（薩摩川内市）－県議会（鹿児島）をめぐる攻防の見通し

当初、来月の中旬にもなるかと予測されていた市議会・臨時議会での「採決」が、11月4日～8日の週に行われる公算が大になって来ており、緊迫の度を深めています。



市議会を経て、県議会での動きとしては、12月18日の閉会までの過程（12月15日・原発特別委）で一気に「採決」に持ち込むのが、県当局の狙いであろうと思われます。

そうした中で、われわれは、川内での「9.27全国相談会」で決定したように、「12.14全国総結集大行動」を準備し、県に対する何波かの要請行動も行いつつ、われわれ闘う側の不屈の意気と力を最大限に見せつけて行かなければならないと考えます。

3. 10月26日（反原子力の日）全国統一行動に向けて

「かがしま反原発連合有志」では10月25日午後2時～5時の予定で、槌田敦先生を鹿児島にお招きして、『福島原発事故3年、科学技術は大失敗だった』のテーマのもと学習会の開催を計画しています。

当日は、昼～午後2時30分の予定で行われる「風船行動」に参加したあと、3.11実行委独自の取り組みとして（1）久美崎テント村への連帯行動、（2）川内原発ゲート前での抗議&申し入れ行動に集中していくことを、近く提案することになっております。

★全国の皆さま、是非熱く連帯して、この困難な局面を闘い抜きましょう！



§ 4. 「住民説明会」はパフォーマンスに過ぎない！

◇鳥原良子（川内原発建設反対連絡会、川内つゆくさ会）

■川内原発に関する新規制基準適合性審査結果についての住民説明会が10月9日（木）から10月15日（水）までに5会場で行われることになり、私は、初回となる薩摩川内市川内文化ホールでの開催に申し込んだ。1200人の定員に、1300人を超える申し込みがあり、関係者・報道陣枠も加えられ、一般の申込者から抽選で約300人が外されることになった。公平な抽選なのかも知らなかった。私たちの仲間の何人かがはずされてしまったが、幸いにも私には入場券が届いた。他の4会場は参加者申し込みは半分にも満たないというが、当日参加は許されない。

結果として当日の参加者は992人で、200人分も空席があったが、当日参加は認められなかった。座席指定できないからではないかと、運営の仕方に疑問が残った。

参加者を限定することや、質疑の時間がたった30分では、十分に住民の意見を聞く場にはならないとして、公聴会または公開討論会と、当日インターネットで公開するよう求める申し入れを鹿児島県内外で集約した緊急署名として、全国から駆け付けた市民グループの方たちとともに、10月3日、薩摩川内市と鹿児島県に対し要請行動を行った。

■私たちは、住民説明会に臨む前に、署名活動に協力してくれた東京や京都、大阪、佐賀のグループの知識人らをアドバイザーに、審査書の問題点について事前学習会を開き、とにかく審査書について疑問をぶつけよう、審査の対象になっていない避難計画についても意見を出そうと具体的に学び合った。事前学習はどの会場でも熱気あふれる意見が続出。住民説明会の場でも公開討論会・公聴会開催の要求をすること、徹底した住民の意見を聞いてもらうために、意見として出すこと、とにかく手をあげ続けて、次々と意見を出すことで、時間延長を図れるのではないかと対策を練った。

当日の川内会場は、駐車場前の入り口をせばめて入場券を確認するなど物々しく、何を警戒していることだろうかといぶかるばかりだった。用意されたイラスト入りのカラーの資料は、かなり大き

な文字で書かれた45ページ。400ページを超える審査書と比較すると実質は20ページ分くらいと思われ、いかにも明瞭に審査が行われたようにほんの一部を記載し、審査結果を「方針を確認」「設計方針は新規制基準に適合するものと判断」などと書かれていたが、本当なら、実際に対策工事が行われて初めて審査合格ではないか。

■司会者が、「質疑は新規制基準や審査結果に限る。再稼働や避難計画については受け付けない」と念を押したが、関心事は、避難計画や再稼働そのものであるから、命を第一に考えてほしい、再稼働ありきの市長へ、考えを改めてほしいと訴える質問者もいた。10人中9人が原発に懐疑的な意見だったのに、最後に質問に立った前・川内商工会議所会長は「今日の説明で疑義が解消された」と述べて、推進側の拍手で終わった。まったくやらせのようで腹立たしかった。

会場で配られたアンケートは、説明内容12項目に対し、「理解できなかった項目」に丸を付ける簡単なもので、丸を付けなければ理解したことになってしまうようなやり方。再稼働ありきで住民説明会が行われたことは否めなかった。十分に意見を言う機会もなく、アンケートの意見欄に言いたかったことを記載したが、消化不良は解消されるはずもなかった。

会場前でチラシすら受け取らなかった強面の男性たちは、アンケート対策のための推進派企業からの集団派遣と思われるが、その証拠をつかめたら、やらせ発覚となるであろうに、何の手がかりもなく残念！（写真は説明会の様子--新聞より）



多くの市民が参加した川内原発の新規制基準審査に関する説明会

◇岩下雅裕（「川内の家」）

■「928鹿児島全国行動」の前日、全国相談会の場で一つの提案が行われた。川内を軸として全国の行動を結びつけ、皆の力で川内原発の再稼働を阻止しようという目論見だ。地元「おんぶで抱っこ」では共同行動の名に値しない。そこで「ストップ再稼働！ 3. 11 鹿児島集会実行委員会（3・11実）が主催する。また「反原子力の日」である当日、久見崎海岸で「風船行動」が取り組まれることから、「風船行動」～集会・デモというジョイント・イベントとなる。

■薩摩川内市では10月9日、5市町の皮切りとなる「説明会」が行われた。県の主催で、原子力規制庁が川内原発の審査結果を説明するというものだ。5会場のうち唯一抽選ということになった。というのも、原発推進と原発反対の対立が他より明確で、特に推進派は川内を「主戦場」と位置付けていて、応募期間中、定員1100人に対し500人程度が応募した段階で、一挙に800人が増加した。推進派の組織的な動員が明らかだ。

当日は、会場に入らない40人程がいくつもの横断幕を掲げ、マイクでの訴えとビラまきをしていると、組織動員のバスが到着。沈黙した作業服姿の集団が続々と入場する。こちらのビラをいったんは受け取りながら、これ見よがしに投げ捨てたりする場面もあった。参加者はランダムに座席指定されており、組織動員の人々に囲まれて心細い思いをした方もいたかもしれない。

原子力規制庁の説明資料は40枚以上のスライドで構成されていて、「こんな質問はするな」と言わんばかりに「ご質問への回答」という別刷りのパンフレットがあった。例えばこうだ。Q：川内原子力発電所の安全性はどのくらい高まったのですか。A：厳しい事故が発生したとしても・・・その可能性は極めて低く抑えられるものと考えています——と。

■陽に陰にこんなプレッシャーがかけられたが、説明会の設定（抽選や30分という説明時間）それ自体への批判が行われ、途切れず「質問」が続いた。①福島事故の収束の見込み、②基準地震動の甘さ、③核廃棄物の処理の見通しのなさ、③避難

計画が机上の空論であること——等々。開始から1時間が経つころ、最後の質問者として指名されたのはなんと、薩摩川内市原子力推進期成会の会長だった。

読み上げられた「原稿」はこうだ。「原子力規制庁の説明は丁寧でよく理解できた。川内原発の安全性が良く判った。再稼働を推進して欲しい」と。そして一斉に動員された人々の拍手、「これで説明会を終了します」とのアナウンス、退場が続いた。説明会はアリバイづくりに過ぎず、会長の発言はまさに「ヤラセ」発言、ということが明らかになった一瞬である。

■川内では、山之口自治会の再稼働反対請願の提出を受け、ハガキで再稼働の賛否を問う自主的な「住民投票」の運動が進んでいる。原発再稼働による「経済の上向き」なるキャンペーンが一定の影響を持つなか、行政の末端に位置づけられがちな自治会から、阻止の力を掘り起こしていこうというねらいだ。まだまだこれからだが、ある生協のハガキ配布協力を得られることになるなど、可能性は拡大しつつある。

■ぜひ10月26日前後の全国統一行動を具現化していただきたい。また、風船をあげたあと、久見崎地域をめぐって原発ゲート前に至るデモにも参加をお願いしたい。同時期には薩摩川内市議会でも原発推進陳情の委員会採択がもくろまれ、ひきつづき本会議採択という形で再稼働「同意」が演出される可能性がある。「説明会」に続く第二の闘争局面だ。川内で出鼻をくじき、全国の原発の再稼働を阻止しよう。



§ 6. 「川内原発再稼働阻止全国リレーアクション」を終えて

◇藤岡彰弘（反原発市民の会・富山）

■1. 「全国リレーアクション」とは、9月28日の「川内原発再稼働阻止 鹿児島集会」を側面から盛り上げることを目的に、全国各地の運動体に呼びかけ、鹿児島・川内原発現地へのメッセージを書いた横幕(1.7m×1m)を送ってもらうこと。

当日は、原発ゲート前行動と集会会場（天文館公園）とで目立つように掲示しました。集まった横幕は、全部で31枚です。

当初は、その横幕を北から南へリレーしていくことや、各地のアクションの現場での受け渡しを考えたのですが、準備不足と宣伝不足とで、とにかくなるべくたくさん横幕を送ってもらうことを目標としました。

■2. 9月28日までの主な経過

- 6月13日：鹿児島市内での全国相談会で「全国リレーアクション」の企画を提起
- 7月16日～23日：柏崎を皮切りに、泊→大間→女川→東海の各現地で、企画をアピール
- 8月3日～8日：九州各地を、福岡→長崎→佐賀→大分→熊本→鹿児島の順に要請して廻る
- 8月31日：薩摩川内市内での「8・31九州・鹿児島川内行動」で途中経過をアピール
- 9月28日：午前中のゲート前行動では、ガードレールに沿って長く展開、午後の9・28集会（天文館公園）では、ステージ下の正面スペ

ースに20枚以上を展開し、残りはステージ脇などに飾る

■3. 今後に向けて

様々な方々のご協力によって集まった横幕を、何とか9・28集会とゲート前行動とを盛り上げる一つの素材とすることができました。

しかし、こういった行動の事務機能を、全国阻止ネットの事務局に担ってもらうには、やはり無理がありました。また、スタートが遅く、準備不足も重なって、「リレーアクション」という趣旨を活かせなかったことには、どうしても悔いが残ります。

今後こういった側面応援的な取りくみについては、事務局の機能も含めたプロジェクトチームを、全国阻止ネット内部から自発的に生み出していくことが求められると思います。

なお、お寄せいただいた横幕は、1枚1枚画像にしっかりと記録した上で、再度、鹿児島の方へお届けしようと思います。これからも、これらの横幕の登場場面はきっとあるでしょう。集まった横幕が少しでも川内現地の皆さんを後押しし、全国各地の運動をつないでいく力になることを願っています。

参加、ご協力いただいた多くの皆さんに、あらためて感謝申し上げます。



§ 7. 福島の人たちと現地の協力で 「フクシマ」 を伝える辻説法

◇青山晴江（再稼働阻止全国ネットワーク、たんぽぽ舎ボランティア）

■原発再稼働阻止全国ネットワークの4月京都合宿相談会での提案から、多くの方々の協力で実施された「鹿児島・辻説法」キャラバン。7月は2度、延べ10日に渡り町々の辻で「原発いらない福島の女たち」が市民に知らされない福島の状況話をしました。前半は7月18日～22日、福島県大熊町から仮設に避難中の木幡ますみさんが薩摩川内市・鹿屋市・鹿児島市・霧島市・他で計30か所を、28日～8月1日は郡山市の黒田節子さんが日置市・始良市・出水市・いちき串木野市・他で計35か所を、各15～20分ほど、炎天下であるいは風雨のなか「鹿児島の皆さん、福島から来ました！ここを福島のようにしてはいけません。再稼働を止めましょう！」と声を絞るようにして訴えました。移動の街宣車からは、三遊亭歌之助さんのテープの声「知事は原発を動かそうとしています。事故が起きれば、逃げられませんかよ～」と鹿児島弁で大きく流れ町に響き渡りました。

夜は各地で準備してくれた集会があり、福島報告を真剣な眼差しで聞き、交流会では質問がさかんにでました。キャラバンスタッフは現地の方々と阻止ネットから「川内の家」の岩下さん・前半に奥野さん・後半に青山が参加し、辻説法をしている間、各現地市民団体の方たちと一緒に、町の人にチラシを手渡したり、ポスティングをして回りました。



■駅前・畑の中の団地・商店街・海岸・市役所前・大型ショッピングモール・観光地、真夏の鹿児島

の陽射しが強く照り返すなかで、「フクシマを繰り返さないで」と訴える声が響きます。話を聞いている人々の多くは再稼働に不安を抱いていました。団地の部屋から出てきて、頷きながら聞いているご夫婦。民家の庭でチラシを受け取りながら「ここには情報がない。みんな何も知らずに、考えずにいて、どんどん政治は悪い方に流れて自分たちが犠牲になるばかりだ。腹が立って、胸が痛むがそれを話す相手もいない。」と語る男性。窓の網戸越しに腰をかがめて「いい話をしていると思ったら、福島からですか、よく来てくださった、ありがたいことです。原発は反対じゃ。」と言う女性。子供の甲状腺の話に耳を傾けている保育士さん。若いひともしチラシを受け取り、再稼働反対の文面を読んでいます。店の閉まったシャッターの郵便受けの小窓から細い指で隙間をあげ、おばあさんがじっとフクシマの話を聞いていました。そっとチラシを差し出すと潤んだ目で頷いて受け取ってくれました。この声にならない思いを大切に結んで、再稼働阻止への力にしていきたいと思いました。

■その後9月28日、鹿児島市大集会の夕方から30日まで、福島県富岡町から避難した木幡節子さんが、天文館交差点・川内駅前・商店街・県庁前・九電支社前などでマイクを握り、各場所での効果的な話題を選んで、福島事故後の悲惨な状況、ある時は1時間以上にわたり、熱く語られました。川内駅前での様子は毎日新聞鹿児島版に写真入りで載りました。川内商店街では12軒の店を回り、再稼働に賛成は一軒もなかったとか。現地ではメッセージチラシを配ったり、「福島の女 辻説法」の旗を持って同行してくれたりの人々の協力がありました。鹿児島の城さんは全行程を付き添い、翌日の東京での阻止ネット会議に詳しい行動報告を送ってくれました。

辻説法で聞いたフクシマの話を鹿児島の人々は忘れずにいてくれるでしょう。それが再稼働を阻む民意の広がりを後押ししてくれますように、と願わずにはいられません。

§ 8. 「若狭の家」の設立と、その目指すところ

◇木原壯林（「若狭の家」運営委員会共同代表 事務担当）

■安全な原発など存在せず、原発は人類と共存し得ないことは、福島原発の惨状が実証している。原発被害避難者の悲惨さは筆舌に尽し難い。事故炉は、高放射線量のため、内部や地下の状態が分からず、事故収束の目途は全く立っていない。汚染土壌の除染、汚染水の漏洩防止、放射性物質の除去作業はトラブル続きである。使用済み燃料や放射性廃棄物の完全処理は不可能であり、安全保管法もない。原発事故の要因となる地震や火山噴火の時期と規模の予測も不可能である。現在科学・技術は原発を制御できるほど進歩していない。

したがって、原発を運転し続ければ、再びの大惨事は避け難い。それでも政府、電力、原子力規制委員会は原発再稼働を画策し、全く実効性のない事故時避難計画を立案している。

一方、世界人口は50年以内に減少に転じることと、省エネルギー機器開発や発電・蓄電技術の改良が急速に進歩することが相まって、近いうちにエネルギー使用量・要求量は減少し、原発は不要となると考えられる。

このように事故を避け得ないのみならず、近々不要となる原発であるにも拘らず、政府、電力、規制委は、新規制基準で国民を欺き、再稼働を画策している。いま、再稼働すれば、1年間以上の停止によって、折角減少した核燃料の放射線レベルが、元に戻り、危険度が圧倒的に増す。彼らに要求される切実かつ緊急な課題は、再稼働ではなく、福島惨状に対する対策、被害者救援と、安全かつ早急な全原発廃炉の検討である。

■若狭地域には、13基の原発と「もんじゅ」がある。まさに原発銀座であり、国内でも最も原発事故の確率が高い。しかも、若狭の地形、道路、交通手段を鑑みると、事故に際しての避難は、福島とは比較にならないほど困難で、被曝なしでの避難など考えられない。

若狭の原発が発電した電力の主要消費地であり、電力消費を通して間接的に原発推進に加担してきたともいえる近畿地域は、一旦若狭で原発事故が起これば、大気中を飛来する核分裂生成物および

琵琶湖（近畿1,600万人の水がめ）から供給される飲料水の放射能汚染による被曝被害地になる。近畿は福井からの避難先とされているが、安全な受け入れなどできる態勢も体制もない。

■このような若狭の原発の再稼働を阻止し、全廃に追い込むためには、原発立地＝若狭と電力消費地＝関西の反原発運動の圧倒的な高揚が肝要である。しかし、若狭の反原発運動の実態は、八面六臂のご活躍の方々が居られるものの、その数には限りがあり、高浜、大飯などの住民多数の賛同を得ているとするには程遠い。これらの自治体の経済の原発依存度（補助金や原発・原発関連産業就労者の割合）が大きいことが主要因であろう。一方、電力消費地での原発NOの運動も、盛り上がり欠ける。四国の人口約410万人、九州の人口1,500万人弱と比べると、近畿の人口は2,100万人弱と格段に多い。しかし、愛媛や鹿児島での6千人から1万人に近い結集に比べて、近畿での結集は圧倒的に少ない。

■この状況の下、「若狭の家」は、中嶋哲演、服部良一、小林圭二、柳田真の各氏に顧問をお願いし、近畿各地の13人を運営委員会共同代表として、10月1日に発足した。「若狭の家」には、近畿から出向いて長期に滞在して、福井、京都北部、石川で活動している人々と討議・情報交換・交流を行い、チラシ等の定期的かつ広域な各戸配布を効率的に行う。また、原発立地地域の住民との頻繁な対話を通して、原発全廃の運動を強化あるいは組織する。一方、福井で反原発運動を展開している人達の運動拠点としても活用し、若狭地域での反原発運動の活性化を図る。

「若狭の家」運営委員会は、来年早々にも日程に上る高浜原発再稼働を阻止するために、来年3月に現地で大闘争を展開し、それに続いて、大阪での関電本社包囲1万人大集会を勝ち取ることを呼び掛けます。

あらゆる創意と工夫を凝らして、若狭の全原発を廃炉に追い込む大きなうねりを構築しましょう。

「若狭の家」をご活用ください。

§ 9. 川内原発再稼働阻止テント群へ！

■鹿児島県薩摩川内市の久見崎海岸に脱原発のテントが立てられた。9月26日の午後である。10月15日でちょうど20日となる。

このテントは「脱原発テント6号店」と名乗っているが、博多の九電前テントを初めとして今日まで「脱原発」を掲げて立てられたテントの6番目にあたるというほどの意味である。このテントは、特定の団体や組織のものではないし、久見崎海岸の一般公共海岸の広い一角に、誰でもが自由にやってきて、テントを立てるなどで、脱原発・川内原発再稼働に反対する意志を示して貰いたいという願いが込められている。

■川内原発再稼働の動きは、9月10日に原子力規制委員会の審査に適合しているという結論を得た。ボールは鹿児島・薩摩川内市に投げられた形だ。だが問題は単純にそのようになっているのではない。県知事伊藤雄一郎も薩摩川内市岩切秀雄もある意味及び腰である。自らが積極的に再稼働の責任を負いたくはないのである。原発の安全性などについて「安全である」などの確信を持たないまま、再稼働をしたいと考えているだけである。だがそれを首長としてどのように説明できるのか。

つまり原発の安全性については、国あるいは規制委が担保する、それを地元住民が理解する、という最低の条件を形づくる必要があるだけだ。伊藤知事や岩切市長の本音は再稼働なのだが、そのための政治的コロモを纏わねばならない。だが、



◇淵上太郎（経産省前テントひろば）

再稼働に理があるようなコロモを纏うのは簡単なことではない。

10月9日、意図的に極めて制限された「住民説明会」が開催されたが、発言した殆ど全ての人々が再稼働に疑問を呈している。

■鹿児島県や薩摩川内市は、説明会を開催せざるを得ないし、そこで再稼働に関する「理解」を得なければならないのだが、結局のところ伊藤知事など再稼働推進派の意図は挫折し始めている。つまり、薩摩川内市の多くの住民、いちき串木野市など周辺自治体の多くが再稼働についての重大な疑義を表明し始めているのである。3・11以降、わが国民衆が原発に対しての否定的な意向を表明していることに、国（安倍内閣）や鹿児島地方自治体の首長（伊藤知事、岩切市長）、そして原子力規制委員会はまるで分かっていない。否、彼らは脱原発の国民的運動や闘いを嘗めてかかっている。地元自治体に若干の経済的利益をちらつかせることで、地元住民をも従うだろうという対応が暴露されつつあるのだ。

■川内原発再稼働阻止!のテントは、こういった地元住民の再稼働反対運動がさらに盛り上がる契機となり得るものである。テントは、あらかじめ地元反対運動の了解を得て立てられた訳ではない。もちろんそのような了解を得た方が良かったと言う意見はあり得る。



§10. 川内—伊方原発再稼働に反対する南予住民の運動

川内原発再稼働に連動する四国電力の動き・・・アクセルを入れ直した？

◇八木健彦（「伊方の家」）

■当初、再稼働一番手とみなされながら、基準地震動をめぐって原子力規制委と調整がつかず足踏みを続けてきた四国電力は、川内原発の審査書決定をもってアクセルを入れ直したかのようだ。四国電力はここがチャンス！とばかりに動き出したかのようだ。9月9日、基準地震動：6百数十ガルへの引き上げを突如発表し、県知事や伊方町長への了解を求めた。同12日の審査会合で650ガルと明らかにした。それは、川内原発審査書決定に合わせた政治的判断に基づく動きであり、原子力規制委の人事交替を見据えた動きである。現場では緊急対策所の建替え工事が着手され、その他もろもろの工事が急ピッチで進行中で、総費用1500億円を投入とのことだ。そして今年も、20キロ圏2万8千世帯に対し2～3人ひと組で戸別訪問のローラー作戦を展開した。バスに乗り遅れるな、と来春～夏の再稼働に向け、四電の動きは急ピッチとなっている。

また、愛媛県は5キロ圏内に対するヨウ素剤配布の説明会及び配布を実施し、福祉施設に対し10月末までに避難計画の提出を要求（現在10%）。しかし、避難時の受入れ先を自分で見つけるなど無理難題が多く、まったく不可能な状態と言われている。

川内原発再稼働阻止へ、川内・鹿児島地元及び全国との連携強化を！

鹿児島行動に、愛媛からは6月に7名、9月に10名が参加し、伊方原発再稼働と川内原発再稼働の連動性を意識化し、伊方を止めるためにも川内を止める必要性を感じてきている。薩摩川内市や周辺地域の住民の運動をたえず紹介しながら、川内原発再稼働阻止を意識化すると同時に、どういう住民の運動が必要また可能なのかを学んでいく。

川内原発現地の運動は、伊方原発現地にとって共感と共に学習と教育の場でもある。そういうことも含んでの連携強化が求められている。

■10月は伊方でも行動月間となる。10・11の定例のゲート前行動は、広島ピースリンクの仲間たちによるボートでの海上デモがあり、大きくなるうとしている。19日：第28回伊方集会（全四国・全瀬戸内へ呼びかけ伊方原発ゲート前行動など）、26日：八幡浜集会（川内原発再稼働阻止・同意拒否の全国統一行動の一環）などの準備が進められている。そして28日には伊方原発差止め訴訟の重大局面となる第9回口頭弁論が予定されている。10月は川内とともに節目となる行動の季である。

伊方原発再稼働阻止南予住民連合への展望を！

伊方原発から50キロ圏に位置する宇和島市で9月上旬、市議員と市民が一体となって「原発いらんぜ！宇和島市民の会」が結成された。既存の諸団体と3・11後の市民運動が反原発・再稼働阻止の一点で合流したこの会の結成は、南予地域にうねりを起こす起爆剤としての役割を果たすだろう。事実、その影響は確実に広がり、八幡浜でも新たな運動への模索が始まっている。南予各地にまとまった運動体を創りあげていくことが求められている。伊方町では、とにかく何名かが公然と原発いらん！再稼働反対！と声を上げ、訴える突出が求められている。それがあれば、状況を大きく流動させることも可能となる。

こうして南予地域で、伊方原発再稼働阻止南予住民連合への展望を拓（ひら）いていき、全県の運動の強力な土台を創り出していかなければならない。川内原発再稼働阻止へ闘いながら、伊方持久戦を前進させよう。

薩摩川内市議会に全国自治体議員連名で初の陳情

けしば誠一（反原発自治体議員・市民連盟、杉並区議会議員）

■反原発自治体議員・市民連盟は、9月27日の薩摩川内市で行われた全国相談会で、全国自治体議員の「川内原発再稼働に反対する意見書提出の陳情」を提案、原発に反対する薩摩川内市議会議員や鹿児島県議会議員にお会いし、議会の現状と対策を相談しました。

5日間で全国から68名の地方議員が賛同

薩摩川内市は10月9日市議会定例会最終日、再稼働に向けた住民説明会を終わらせ、10月下旬に原発問題調査特別委員会で、再稼働に反対する陳情（賛成は1陳情のみ）を不採択とし、11月冒頭臨時議会で再稼働を認める方向を定めました。地元議員から本会議7日前までに提出しないと委員会に付託がされないことが伝えられ、陳情提出を10月2日に急ぎよ繰り返し上げました。直ちに議員連の仲間に連絡、広瀬隆さんには原発立地議員に呼びかけていただき、2日まで賛同議員68名集めることができました。10月18日、21名の追加署名を第2次提出します。

市民以外の原発反対陳情は審議させない？

薩摩川内市議会には、市外からの陳情は審議しないという驚くべき議会規則があります。この規則で、全国の川内原発反対の声を議会は封殺してきたのです。審議されるためには紹介議員を要する請願にする必要があっても、原発問題調査特別委員の佃議員と井上議員は紹介議員になれません。さらに薩摩川内市議会では、紹介議員になると請願内容に責任を負い、他の委員の質問に答えなければならない異例の規則があります。残る2名の再稼働反対議員は保守系であるため、賛成派からの質疑に対応は困難です。議会に2重3重の足かせをはめて全国の反対の声は表現できないようにしてきたのです。

川内市民と遠嶋鹿児島県会議員も共同代表に

引き下がるわけにいかず、市民団体代表の鳥原さんに相談し、陳情代表者には市民の松田さんを紹介され、2日に陳情書を松田さんに提出していただきました。ところが、ここで議会事務局を通じて、「議員の陳情代表者が市民(松田さん)なのはおかしい」というクレームが付けられました。これでは議員の団体陳情の扱いはできず、松田さん一人の陳情として扱うというのです。

そこで、松田さんに加え、川内市選出の鹿児島県議会議員遠嶋春日児さんにも共同代表をお願いし、地元議員を代表とした薩摩川内市に事務局を置く全国自治体議員の会の陳情として出すことができました。

9日本会議前に原発問題調査特別委員会が開かれ、本会議で陳情を付託するかどうかの議論が行われ4対4で同数、幸い委員長が賛成に回り特別委への陳情付託は決まりました。10月20日以降、陳情審議がなされます。それまでに全国からさらに賛同拡大願います。

鹿児島県議会に請願を提出し再稼働反対貫こう

薩摩川内市の決定を受け、鹿児島県は11月27日開会の第4回定例会で、特別委員会と最終本会議の議決で、県として再稼働決定に踏み切る方針です。これに対し遠嶋春日児県議らを紹介議員とする請願を提出します。全国からさらに再稼働反対の自治体議員の声を集中しましょう。

（●問い合わせ：反原発自治体議員・市民連盟HP <http://nonukesjapan.org/> 電話 090-5497-4222）

本の紹介 反原発を闘う必読の書『浜岡・反原発の民衆史』

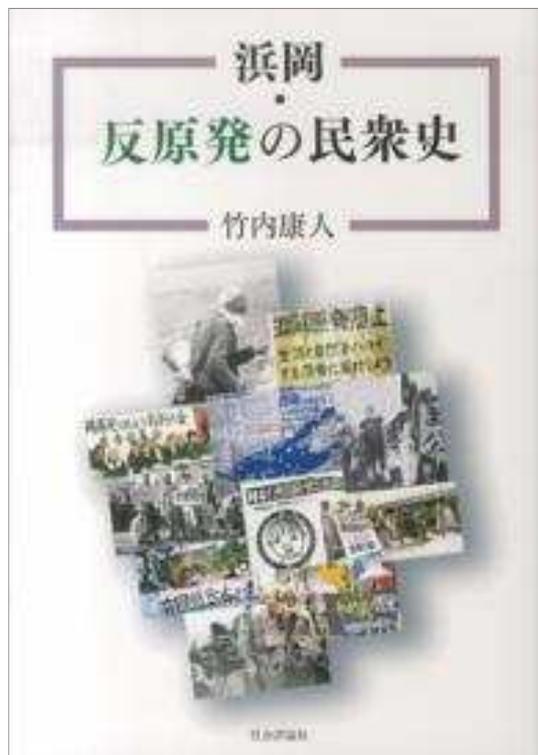
竹内康人 著 社会評論社刊 2800円 サイズ A5判/ページ数 370p

北村小夜（元教員）

表題に示されている通り、浜岡における反原発運動の歴史であるが、それは同時に地域の大地、海、それに住民の体や心までも侵し続ける中部電力浜岡原子力発電所の歴史でもあり、浜岡原発の全容が分かる一冊である。

著者は1957年、中部電力が原子力課を設け開発に向かい始めた頃、浜松で生まれ、80年代に反原発運動に参加し、浜岡原発を考える静岡ネットワーク会員、2002年浜岡原発運転差止仮処分申請および2012年浜岡5号機運転再開差止仮処分申請にも参加して活動中の歴史研究者で、著書には『浜松・磐田空襲の歴史と死亡者名簿』『調査・朝鮮人強制労働①炭鉱編』『同②財閥・鉱山編』がある。

本書は1960年代から50年余りに及ぶ浜岡原発に関わる事実が歴史研究者の目で、情に溺れたり、激したりすることなく、ぜい肉を削ぎ落として無駄のない文章でつづられている。それゆえに膨大で複雑な内容が370ページに納まりきれたのであろう。次のような構成であるが、全体を通して小テーマに区切られ、ところどころに写真や資料が挿入され飽きさせない。



巻末には、表「中電浜岡原発と地域財政」が作成されている。表明した分だけであるが、すさまじい金額に驚くとともに金目の力を感じる。

また、続けて掲げられている1956年から2014年に及ぶ「浜岡・反原発の民衆史 年表」も、行政、中電の動きと対する民衆の動きが網羅されて各地で運動を進めるものにとっても重宝であろう。

構成は

I. 地域での反原発建設反対運動の形成

第1章は「浜岡原発の建設と浜岡原発反対共闘会議の結成」で、1960年ごろからの原発誘致から1974年の2号機起工まで。中電から打診を受けた町長が、水野成夫から「金の卵を産む鶴が降りたようなもの」と聞かされ歓喜したり、「地主が土地を売っても漁民は海を売らない」と強気だった漁協が補償交渉で切り崩されていくような場面を経て、共闘会議が活発に活動する中、1号機臨界・試運転。2号機起工式。

第2章は「浜岡原発の稼働と環境汚染・地域破壊」で、1号機の冷却水漏れや、地震と安全性問題、3号機増設などに伴い反原発の運動が高まる一方、中電の寄付と国の原発交付金にたかるような町財政ができあがり、地域住民の金銭感覚や社会意識が蝕まれる状況が現れる。

以下、目次を追うと

II. スリーマイル・チェルノブイリ事故と反原発市民運動の形成

第3章「浜岡原発に反対する住民の会の結成と3号機反対運動」

第4章「浜岡1号機とめようネットワークの結成」

III. 老朽化・原発震災問題に抗する反原発運動の形成

第5章「5号機増設と浜岡町原発問題を考える会の結成」

第6章「浜岡原発を考える静岡ネットワークの結成」

第7章「浜岡1号機事故と浜岡原発運転差止仮処分申請」

第8章「浜岡原発運転差止訴訟本訴の会の活動」

IV. 福島原発震災前後の反原発運動

第9章「浜岡原発訴訟地裁判決とプルサーマル導入反対運動」

第10章「浜岡原発運転差止訴訟控訴審」

第11章「福島原発震災と浜岡原発の停止」

第12章「原発再稼働反対の運動」

と、それぞれ小テーマを抱えて続き、第12章の小テーマは、15「反原発をあきらめない」、16「丹田に力を！反原発の行動へ」で、反原発を闘うすべての仲間への呼びかけである。

さらに著者はおわりに反原発の表現の中で印象に残った言葉として、

1、核と人類は共存できない

2、原発と民主主義は相いれない

3、地震の国に原発は無理

4、国の安全を信じたら殺される

5、原発は差別、原発は犯罪 を挙げている。書いても書いても書ききれない著者の本音であろう。

本の紹介

『 原発再稼働 絶対反対 』 - 再稼働阻止全国ネットワーク編 -



(800円+税)

出版：金曜日

福島原発事故は収束に向かうどころか、汚染水漏れ問題は深刻化し避難住民の帰還にも目処が立っていない。ところが、安倍政権は原発廃炉を求める市民の声を無視し、再稼働を推し進めようとしている。そんなことは絶対に認めないと、原発再稼働阻止闘争をしている全国の団体が手を携え、ネットワークをつくった。怒りの声、さまざまな運動などを現地から伝える。

【もくじ】

●まえがき ●現地からの報告(16) 泊、六ヶ所、東通、女川、福島、柏崎刈羽、東海第二、横須賀原子力空母、浜岡、志賀、敦賀～大飯、伊方、玄海、川内、島根、大間 ●「再稼働して自殺しなさい」 広瀬隆 ●再稼働のための「原子力規制委員会」 天野恵一 ●日本の原子力発電所一覧 ●再稼働阻止全国ネットワーク連絡先
お求めは info@saikadososhinet.sakura.ne.jp までご連絡下さい

全国の原発再稼働を阻止しよう！

—再稼働阻止 現地支援カンパのお願い—

二度と福島のような事故を起こしてはならない。その強い気持ちで、地元のみなさんの賛同と協力のもと、「川内の家」(鹿児島)・「伊方の家」(愛媛)を立ち上げました。原発を再稼働させないため、現地での活動を応援してください。なお、皆さまからのカンパは、全国から現地行動の支援に参加する方の交通費補助と、「川内の家」「伊方の家」の活動諸経費のために使用いたします。

口座記号 00110-0-688699 加入者名 再稼働阻止全国ネットワーク
備考に「現地支援カンパ」とご記入ください。

★★★再稼働阻止全国ネットワーク ホームページ をお役立てください★★★

<http://saikadososhinet.sakura.ne.jp/>

・再稼働阻止に参加する団体・グループのさまざまな活動について紹介しています

・「伊方の家」通信、「川内の家」通信にご注目を！

<http://saikadososhinet.sakura.ne.jp/ii/>

<http://saikadososhinet.sakura.ne.jp/sd/>

・再稼働問題をはじめ、核燃サイクル、処分場問題、原発輸出などに関する報道、ニュース記事を随時紹介しています。

The screenshot shows the homepage of the '再稼働阻止全国ネットワーク' (Stop Restarting Nuclear Power Plants Nationwide Network). The page features a header with the organization's name and a navigation menu including 'Home', '結成集会', '設立までの経過', '福島県の情報', '各地の情報', '資料Box', 'お問い合わせ', 'NEWS', and '署名・賛同'. The main content area is divided into several sections: '新着情報(地域の活動、活動報告など)' with a list of recent news items, '日程のお知らせ' with upcoming events, and '川内原発関連ニュースまとめ'. On the right side, there are featured articles for '「伊方の家」通信' and '「川内の家」通信', along with a '再稼働阻止ネット加入はこちらをクリック【サポーター募集中】' button and a 'side menu' with links to 'お問い合わせ', '現地行動のための交通費基金カンパ', '再稼働阻止ネットNews', '署名・賛同', and '資料Box'.

◆サポーター募集中 個人年会費 3,000 円、団体年会費 5,000 円

口座記号 00110-0-688699 加入者名 再稼働阻止全国ネットワーク

通信欄に、個人サポーター/団体サポーター/カンパ のいずれかと、お名前・連絡先(住所、電話またはメールアドレス)を添えてお申し込み下さい。

◆問合せ：〒101-0061 東京都千代田区三崎町 2-6-2 ダイナミックビル 5F たんぽぽ舎気付 再稼働阻止全国ネット事務局 TEL 070-6650-5549 FAX 03-3238-0797 (再稼働阻止全国ネットワーク宛と明記) メール info@saikadososhinet.sakura.ne.jp、HP <http://saikadososhinet.sakura.ne.jp/>

◆再稼働阻止全国ネットワーク NEWS 編集担当：寺田道男(京都) 海棠ひろ 千葉澄子 天野恵一

※原発再稼働問題にとりくむ全国各地の情報(市民団体の活動レポートや新聞記事、自治体の動きなど)をお寄せ下さい。メール送付先 report@saikadososhinet.sakura.ne.jp